



TITLE:

<第2編 パプアニューギニア>【事例5】Townsend / セピック・ヒル地域 / サニオ・ヒオウエ族

AUTHOR(S):

大塚, 柳太郎

CITATION:

大塚, 柳太郎. <第2編 パプアニューギニア>【事例5】Townsend / セピック・ヒル地域 / サニオ・ヒオウエ族. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 5: 19-27

ISSUE DATE:

1994-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187461>

RIGHT:

【事例5】Townsend/セピック・ヒル地域/サニオ・ヒオウエ族

1. 調査

対象

パプアニューギニア、東セピック州、セピック・ヒル地域、サニオ・ヒオウエ方言語族(調査の行われた1966-67年に234人)

調査者

Patricia K. Townsend. 先史学者である夫の William H. Townsend も同時期に調査を行い、本研究のデータ収集にも協力した。

調査期間

1966年1月-1967年10月。ただし、サニオ・ヒオウエ族のハムレットに滞在したのは12ヵ月間で、他の10ヵ月間は近隣の集団やセピック州などの広域調査に費やされた。これらの広域調査の結果は、本研究成果にはほとんど含まれていない。

報告

成書としては、Ann Arbor から出版された下記の Ph.D. 論文が相当するが、特定のテーマに焦点をあてた論文は多数ある。

Patricia K. Townsend: Subsistence and Social Organization in a New Guinea Society. Ph.D. Dissertation, University of Michigan, 1970.

2. 対象の概要

地域の概要

パプアニューギニアでは、植民地行政官(イギリス、ついでオーストラリア)およびキリスト教宣教師、さらにはプランテーション・オーナー等による西欧文化との接触は、北海岸と島嶼部で早くからはじまり、1950年代にはいると、いわゆる『高地(Highlands と H を大文字で表わす)』で起こった。しかしながら、『高地』と海岸部の間に横たわる地域では、1960年代に初めて接触された

集団も多く、ごく最近(1980年代)になって存在が知られた集団さえある。本調査対象のセピック・ヒル地域(標高は200~300m以下)もその一つである。

セピック・ヒル地域では、Townsend の調査まで民族誌研究も含めて本格的な調査はなされていなかった。パプアニューギニアでは比較的早くから始まった言語研究も、本対象集団の言語がセピック・ヒル語族(family)に属することを明らかにしているだけであった。なお、この地域の調査研究はパプアニューギニアの中でも遅れているが、1980年代になって、日本の民族学博物館の吉田集而氏を代表者とする民族誌研究が行われている。

セピック・ヒル地域の集団はパプアニューギニアの中でも物質文化が乏しく、半定着的な生活を送り、サゴヤシ採集に強く依存している。サゴヤシ採集以外の生業活動としては、放し飼いされるブタの飼育、野生動植物の狩猟、漁労、採集、それにきわめてわずかな焼畑農耕(主作物はプランテイン・バナナ)がある。セピック河下流域の集団との交易は古くからあったはずであるが、現在(Townsend の調査時)でもその影響は小さく、日常生活で用いられる物資は基本的に居住地域内で入手されていた。少数のスチール製の斧が唯一の外来の道具であった。また、パプアニューギニアの北部沿岸地域ではプランテーションでの契約雇用(通常は2年契約で若い男性のみ)が古くから行われてきたが、この地域では1960年代になって始まったものの、その影響は微々たるものであった。

セピック・ヒル地域とは行政的な単位でもなく境界もあいまいであるが、セピック河から南に向かう支流に沿った標高数百mまでの地域を一般に指している。なお、本調査対象集団とその近隣地域に限っていえば、標高はせいぜい200mで、年雨量は5000mmほどで季節変化は少ない。

対象集団の概要

サニオ語族のヒオウエ(ヘヴェ)方言語族は、セピック河の1支流であるウォガムス川(サニオ語ではミヴェ川)のさらに支流であるヘヴェ(ヒオウエ)川流域の約100平方kmの土地に、離合集散するハムレットをつくって居住する。地理

的な特徴や生業パターンは前述のとおりであるが、この地域はセピック・ヒル地域の中でも外部からの影響が最も少ない地域の一つであった。植民地行政官によるはじめてのパトロールは1961年に行われた。そのため、キリスト教の宣教師も調査時点までこの地域を訪れたことはなかったし、プランテーションでの契約労働者も調査時点に不在であった4名が最初であった。すなわち、この調査対象集団は『伝統的な』生活様式を強く維持しており、このことが本調査研究で対象となった理由でもあった。

3. 調査項目と方法

人口

ハムレットの人口：サニオ・ヒオウエ族の全ハムレットを対象とする観察・インタビュー調査。年齢は、初経年齢を15歳、通常初産年齢を18-20歳と仮定し、家系と村人の出生順位、さらには外観から、5歳間隔で推定されている。

出生率：インタビュー調査による。閉経後の25人の女性の生涯出生数。再生産期間中の女性にも同様のインタビュー調査を行っているが、出生率については計算していない。

小児(離乳前)死亡率：インタビュー調査による。生存中の女性からの出生児の死亡数に基く。ただし、死亡年齢の推定が困難なため、死亡時点に授乳中であつたか否かで区分している。離乳前の死亡にとくに着目しているが、著者はこの年齢を2歳未満と推定している。対象となった出生児数は、再生産年齢以降(閉経後)の女性からの132人と、再生産年齢の女性から1965年8月1日(推定)以前に生まれた84人(これ以降の出生児は2歳未満での死亡を確認できないため)で、合計216人である。

また、嬰兒殺しについてのデータは、再生産年齢以降の21人の女性に対するインタビューによる。

食糧生産・消費および関連する社会的要因

生業活動と食糧生産：サゴヤシ採集については、7本のサゴヤシについて幹の大きさ、採取されたデンプン量、そのための労働時間などの直接観察・測定調

査。他の生業活動については、ブタの世帯別の飼育数を把握しただけで、狩猟、漁労、採集、農耕は、対象となる動植物のリストが収集されただけである。

食物摂取：著者が居住したハムレット(調査期間中の平均人口が32人)を対象として、1967年5月の連続する9日間と1967年7月の連続する10日間の2回の食事調査。各調査期間の初日の昼と最終日の昼における全世帯の食糧貯蔵量、調査期間中の食物の出入量、外食された量の測定および推定に基く。各食物からのエネルギーとたん白質の摂取量の推定には、既存の成分表が用いられた。

社会的要因：インタビューにより、婚姻、血族・姻族関係、性交のタブーや配偶者と死別後の再婚のタブー、嬰兒殺しの理由等について詳しく調査している。論文では社会構造にも大きな比重がおかれているが、「人口・食糧」に直接関係するのは、出生抑制と嬰兒殺し、及び血族・姻族関係等に基づく食物の贈与をはじめとする相互扶助システムである。

4. 主たる結論

生業適応の基本構造

本調査研究で明らかとなったサニオ・ヒオウエ族の生業適応は、セピック・ヒル地域に散在する小言語族の生業適応、すなわち西欧文化との接触がなかった頃の状態を代表しているといえよう。食事調査のデータに基き、エネルギー摂取量の85%がサゴデンプンから、5%がサゴヤシ以外の野生・栽培植物から、10%が動物(飼育されるブタが圧倒的に多く、ついで魚類)から得られることから、著者はサニオ・ヒオウエの生業の基盤が採集狩猟経済に近いとみなしている。

彼らの社会は基本的に一夫一妻婚であり核家族が中心であるが、未亡人世帯や未婚男性(男性の結婚年齢は、10歳代で結婚する女性よりはるかに遅く、20歳代から40歳くらいまで)が単独で構える世帯も多い。核家族以外のメンバーも生計維持の単位といえるし、核家族の場合も妻が単独でサゴデンプンづくりを行う(他の世帯の世帯主が所有するサゴヤシを切る時にデンプンづくりに加わる)ことなどから、サニオ・ヒオウエの世帯(核家族)は社会的単位ではあつ

ても経済的単位とはいえないとしている。また、彼らの社会にリーダーシップ等の社会組織が未発達なことを、村人の間で発生するコンフリクトを避けるために、離合集散を含むハムレットの頻繁な移動、すなわち半定着的な居住パターンをとらせる重要な要因とみなしている。

人口構成と人口密度

サニオ・ヒオウエの総人口である234人の性・年齢構成から、①男性130人、女性104人と性差の大きいこと。②とくに15歳未満人口は男性が50人、女性が29人と著しく異なることが特徴的である。男性が多いことは、ニューギニア(イリアン・ジャヤを含む)で西欧文化との接触が遅かった集団に共通してみられており、著者は嬰兒殺しによる影響が大きいと判断している(詳しくは後述)。

もう一つの基本的な特徴として、人口密度が2.3人/平方*_{km}であることも明らかにされた。ニューギニアでサゴヤシを常食する集団は、セピック下流域の集団を含めても、人口密度が1人/平方*_{km}以下のものが多いと報告されていることから、サニオ・ヒオウエのレベルはむしろ高いといえる。

サゴヤシの生産性

サゴヤシの生産性は、諸集団で報告されている焼畑農耕の生産性と比較して低くはなく、10,000*_{kg}を得るのに160時間の労働を必要とするレベルである。1人1日あたりのサゴデンプンの平均摂取量は0.67*_{kg}で、女性の1日の生産量が11.2*_{kg}だから、女性がサゴデンプンづくりを1日行くと16.7人・日分を生産できる。サニオ・ヒオウエの全成員(234人)の中で、サゴデンプンづくりを行う女性は少数の高齢者と12-3歳以下の子どもを除く82人であった。したがって、働く女性1人あたりが養える平均人数は3.8人となるので、4.4日に1日程度の割合でサゴデンプンづくりを行えばよいことになる。ただし、これらの女性自身が体調を悪くした場合や、体調を悪くした夫や親族の世話をする場合も多くあるので、通常の状態では3日に1日程度サゴデンプンづくりを行っている。

このように村人が病気に陥ったような時に柔軟に対処できることは、サニオ・ヒオウエの食糧生産の安定性に貢献しており、個人間の相互扶助は Sahllins のいう *generalized reciprocity* に合致している。

ところで、サゴヤシ採集の労働生産性が高く、かつサゴデンプンが長期間保存できることから、余剰生産を生み出す可能性が考えられる。著者はこの可能性を認めた上で、実際に余剰生産が行われない理由として、半定着的な生活パターンをあげている。

出生率と死亡率

再生産年齢以降の女性25人の生涯出生数は132人(男子63人、女子69人)であり、平均値は5.3人であった。この生涯出生数は、Nag (1962)が比較検討した世界各地の非工業化社会の中では低い方に属すものの、ニューギニアの他集団だけと比較すればやや高い。サニオ・ヒオウエの社会では、一夫多妻婚も少数みられるが、2人目の妻は通常未亡人であり、一夫多妻婚自体が出生率に影響を与えることはない。また、夫と死別した未亡人が1～2年間はタブーにより結婚しないことは出生率に影響すると考えられるが、出生率に最も関連するのはすべての女性で出産後の性交のタブーの期間が1～2年と長いことである。

死亡率として把握されたのは、2歳未満と推定される離乳前死亡に基いている。対象数は、再生産年齢後の女性(25人)から生まれた132人と、再生産年齢の女性(25人)から 1965年8月1日以前(著者の推定)に生まれた84人である。離乳前死亡率は48.6%となり、直接比較できるデータがないとはいえ、他の社会の乳児死亡率と比べて高いといえよう。この理由として衛生状態の悪さと非定着的な居住形態に加えて、サゴデンプンを常食とすること自体に起因する二点があげられている。第一は、サゴデンプンが純粋なデンプンに近くタンパク質等の栄養素の含有量が皆無に近いため、とくに授乳中の母親の栄養状態が悪く十分な授乳を行えない可能性である。第二は、サゴデンプンが難消化性のため子どもが摂取しにくく、主たる栄養供給としての授乳の期間が1年以上と長くなることである。

離乳前死亡率を、再生産年齢後の母親と再生産年齢の母親別に比較すると、前者では43.2%であったのに対し、後者では57.1%と高かったことが注目される。この理由として、前者での情報もれの可能性が少ないことから、①サニオ・ヒオウエでは第1子の死亡率が高く、後者のグループでは第1子の占める割合が相対的に高いこと、②ヨーロッパ人によって持込まれた感染症が最近になってサニオ・ヒオウエの社会に及んだことがあげられている。

離乳前死亡に及ぼすもう一つの重要な理由は嬰兒殺しである。再生産年齢後の女性21人に行った詳細なインタビュー調査の結果、この21人から生まれた104人のうち48人が離乳前死亡であったが、そのうちの11人が嬰兒殺しにより死亡していた。この最大の理由は、出生児の直前の兄姉が小さい(特に2歳未満の)場合、あるいは母親の健康状態が良好でない場合、出生児を十分に養育できないと危惧されることである。

嬰兒殺しに関するもう一つの注目される事実は、理由は明瞭にはならなかったものの、性差がみられたことである。すなわち、著者の得たデータでは出生した女兒の14.6%が、男児の6.1%が嬰兒殺しで死亡したことになる。この差は偶然による可能性も否定できないが(統計的には、 $p>0.05$ で有意差なし)、観察された人口構成の性差に影響していることはまちがいない。

人口増加と人口調節機構

人口増加率に関するデータは不十分であるが、再生産年齢を終了した母親(25人)とその女兒の生存数から推定している。すなわち、25人の母親から生まれ著者の調査中に生存していた女兒が29人であり、この29人がすべて再生産年齢まで生存し続けるとは限らないので、純再生産率をほぼ1としている。そして、この低人口増加率の主たる原因として、出生率を抑える出産後の長期に及ぶ性交のタブー、死亡率を上昇させる嬰兒殺しという文化的手段をあげている。

さらに著者は、人口増加率をほぼ0にしていることは、2.3人/平方* μ と μ という人口密度が人口支持力に近いためと考えている。そして、この人口支持力

のレベルを決定しているのは、豊富に存在するサゴヤシではなく、むしろサゴデンプンの栄養欠陥を補う狩猟獣の少ないことに求められると推測している。

5. コメント

本調査研究は、著者が強調しているように、パプアニューギニアの中でもまったくいってもよいほど知られていなかった、セピック・ヒル地域の住民の基本的な適応機構をはじめて明らかにした。また、サゴヤシに依存する集団を対象とする長期間の調査に基く報告がなかったことも、本調査研究の価値を高めている。評者は、本調査研究の成果を十分評価しているし、外部との接触が皆無に近い集団でのデータ収集の困難さも認めた上で、本調査研究の方法論および結果の解釈について以下の問題点を指摘したい。

①本調査研究では、234人の集団から得られた情報に基き出生率や死亡率等の人口学的変数を扱っているが、データの偶然の偏りが重大な意味をもつ可能性を否定できない。しかしながら、本調査はサニオ・ヒオウエの全数調査であり、この点はしかたないといえよう。評者が問題としたい一つの点は、生存中の女性を対象として得る生涯出生数から出生率を、あるいは出生児の再生産年齢までの生存数から人口再生産率を推定することである。この方法は、コホート分析の考え方に基いているので、対象とする生存中の女性と同世代で死亡した女性(結婚した者)をも対象に含めるべきである。非工業化社会の出生率の比較分析を行った Nag も、評者が問題があるとする方法論に基づく結果を数多く用いているし、この方法はマイクロデモグラフィの分野では一般化しているが、結果がオーバーエスティメートされることに注意すべきである。

②サニオ・ヒオウエの半定着的な居住形態の原因を、村人間で生じるコンフリクトを回避することだけに求めているが、不十分に感じられる。この考え方は特に *Man The Hunter* のシンポジウム以降、サン(ブッシュマン)を研究した Lee らによって強調され、遊動的で離合集散性に富む社会の特性とみなされているが、生態学的な要因も含めてさらに検討する必要があるだろう。少なくともサ

ゴヤシに強く依存しリーダーシップ等の社会組織が発達していない集団でも、定着性の高い居住形態をもつものは少なくないことを考慮しなければならない。

③サニオ・ヒオウエの人口増加率がほぼ0であり、その積極的な理由として、出産後の長期間の性交の回避と嬰兒殺しという文化的手段をあげていることは認めるとしても、人口増加率がほぼ0である理由として現在の人口密度が人口支持力に近いことをあげている点には賛成しにくい。著者の考えを押し進めれば、住民が彼らの人口密度が人口支持力に近いことを「認識」し、人口増加を抑制するように自己調整するということになるが、このようなことは考えにくいからである。さまざまな社会で実際に起こったことは、人口密度が(オプティマルな)人口支持力のレベルに近づくと、生業パタンの変化、テリトリーの拡大(戦争などをともなう)、人口移出などによって対処することであった。

④サニオ・ヒオウエの人口支持力の決定要因を野生動物の資源量に求めたことは、いささか無理であろう。動物性食物が人口密度の決定因子として重要であることは、南米の採集狩猟民と採集狩猟も行う焼畑農耕民の比較をした Gross も述べているが、一般性をもつか否かはほとんど検討されていない。少なくともパプアニューギニアでは、野生動物の摂取量の多い集団ほど人口密度が低い傾向にあり、このことは人口密度が低いほど野生動物の生物量が多いことを反映していると考えるべきであろう。評者は、北方の狩猟採集民は別としても、人口支持力とは食物の生産性、中でも常食とする植物性食物の生産性に基いて求められるべきと考えている。なお、本研究で著者が、野生動物を人口支持力の決定要因と推測したことに対して、生物量の推定は困難としても、狩猟活動時間や狩猟効率についてデータを得ていない点からも、一方では野生動物の摂取量が飼育するブタの摂取量よりもはるかに少ないという事実からも、説得性は低いといえよう。

(大塚柳太郎記)